

マキューアンの小説にみるモラルについて

—— *First Love, Last Rites* から *Atonement* まで ——

武 藤 哲 郎

1. はじめに

イアン・マキューアン (Ian McEwan, 1948-) は、1998年 *Amsterdam* でブッカー賞を受賞し、2001年にも *Atonement* がショートリストに選ばれるほど現代イギリス小説では最も人気のある作家の一人になっている。彼は1970年に University of East Anglia の Creative Writing Course に入学し、卒業要件となっている 'a bit of fiction' としていくつかの短編を書いた。それが1972年に短編集 *First Love, Last Rites* として出版され、サマセット・モーム賞を受賞している。彼が若干24歳のときである。テーマとして現代人の狂気、特に「逸脱した性」にこだわりを見せている。興味深いのは、そういった現代人の異常な行為をマキューアンはつぶさに描くだけで、それに対して自分はどうか考えているかという判断を作品の中で行っていないことである。しかし、*Enduring Love* (1997) から彼は人間のモラルを真摯に問うようになり、*Atonement* (2001) では過去に犯した罪を果たして人間は償えるのかというテーマを掲げて作品を書いている。この論文では、「モラル」というテーマでマキューアンの小説を概観し、彼が「小説」で何を描こうとしてきたのかを明らかにしてみたい。

2. *First Love, Last Rites*

この短編集は全部で8つの作品から成っている。'Homemade' は最初に収められている作品で、後に出版社から少し長くして小説にしてみないかと持ちかけられた傑作のうちの一つである。主人公の悪友 Raymond は年上で何かと悪さを教え込む。マリファナの吸い方、万引きの仕方を教え込むがどういうわけか主人公のほうがかうまくなしてしまう。マリファナを吸ってもハイな気分になれないし、本屋に入って万引きをして捕まり、要領の得ない説明をして精神薄弱として解放されるのも Raymond である。挙句の果てに彼は主人公に自慰の仕方を教え、町で評判の色女 Lulu を紹介する。ここで皮肉が起こる。主人公は Lulu との行為で慌てないように、つまり性行為においても Raymond よりも上手であることを示すために、前もって経験を積んでおこうと思うのである。その相手がこともあろうに主人公の10歳になる妹である。ままごと遊びするふりをしながら彼は妹をレイプしてしまう。最後の場面では、浴室でしくしく泣いている妹の傍らで主人公は陽気に口笛を吹いている。自分の妹をレイプするというのは、逸脱した性としては極端な例である。しかし、驚くのはマキューアンが最後に主人公に口笛を吹かせることによって、こういった行為に対する自分の

判断を意識的に作品の中で行っていないことである。逆に彼は主人公に感情移入している感じさえある。主人公は父親が汗水流して工場で一週間に稼ぐ賃金よりもはるかに多い額を、一回の書店での万引きで稼いでいる。その父親が、彼の誕生日に一ポンド相当のプレゼントをして誇らしげにしている姿を見て内心薄笑いを浮かべる場面も描かれている。他に逸脱した性としては幼い少女を蝶を見に行こうと誘い出し、自慰行為の手助けをさせて最後には殺してしまう‘Butterflies’、演技ではなく実際に舞台上で性行為をしてしまう‘Cocker at the Theatre’がある。

この短編集でもう一つ傑作と思えるのは、その題名となっている‘First Love, Last Rites’である。主人公と Sissile は安フラットに住み、初夏には窓際のテーブルの上にマットレスをひき毎日セックスを楽しんでいた。主人公は仕事がなく川で鰻を捕まえて商売にしようとするがうまくいかない。Sissile は缶詰工場で働くようになるが、やがて二人に倦怠期が訪れ、フラットの中は汚れ放題になってしまう。彼らには気になることがある。それは毎夜壁の中から聞こえてくるカリカリという音だった。ある日壁の隙間から大きな鼠が出てきて主人公は火かき棒でそれを叩き潰してしまう。腹の中には数匹の子鼠がうごめいていた。Sissile は、はみ出したはらわたを元に戻し、主人公はそれを新聞紙に包んで丁寧にゴミ箱に捨てる。そして彼らは弱った鰻を川に戻すのである。

We lifted the mattress on to the table and lay down in front of the open window, face to face, the way we did at the beginning of summer. We had a light breeze blowing in, a distant smoky smell of autumn, and I felt calm, very clear. Sissile said, This afternoon let's clean the room up and then go for a long walk, a walk along the river dyke. I pressed the flat of my palm against her warm belly and said, Yes.¹

叩き潰した母親鼠の腹にまだ生きている子鼠を見て彼らは驚き、生命の尊さを感じたのだろうか、丁寧に埋葬する。この小さな事件がきっかけで彼らの倦怠感はどこかに消えて、新鮮な気持ちを取り戻す。ただの気持ちの変化、感情の変化を描いただけのものであるが、読者にはみずみずしい読後感を味合わせてくれる。

他の作品としては、曾祖父が残した日記の中に空間幾何学の大発見（表面の無い面）を見つけた主人公が妻をこの理論によって消してしまう荒唐無稽な‘Solid Geometry’がある。‘Last Day of Summer’では Jenny が徐々に主人公の荒れた家庭に母親役として受け入れられていく姿がほのぼのと描かれている。‘Conversation with a Cupboard Man’は母親の溺愛によって成長を止められた男の話であり、‘Disguises’では舞台女優に引き取られた男の子が、女の子の衣装を身に付けさせられる異様な家庭生活が描かれている。このように *First Love, Last Rites* では現代人の狂気、特に逸脱した性が数多く描かれており、マキューアンが意識的にモラルの判断をしていないところが特徴となっている。24歳のころの最初の作品であるから、いろいろな材料を、いろいろな語りで試しているであろう。

彼のもう一つの短編集 *In Between the Sheets* (1978) は題名から想像できるようにやはり逸脱した性をテーマにした作品がかなり多い。‘Pornography’はポルノ雑誌店で働く O'Byrne が主人公で、彼は淋病を患いながらも病院で働く婦長の Lucy と看護婦見習いの Pauline と二股の関係を楽しんでいる。ある夜 Lucy の家に招かれてワインをたくさん飲んだ後ベッドに縛り付けられて、彼女らによってペニスを切り落とされてしまう。

‘Dead as They Come’はマキューアンらしい面白さが出ている。主人公は離婚暦 3 回の独身男性で大金持ち。ある女性を熱烈に愛してしまう。しかしそれはショッピング・ウィンドウに飾られて

いるマネキンである。彼はそれを店から買って来て、Helen という名前をつけて夜な夜な愛し、食事作り、服も時々買って来て彼女に着させる。しかし、破局は彼の運転手 Brian が留守中家に入ってきてヘレンと関係を結んだと主人公が気付いたときから始まる。最後に彼は Helen を犯しながら殺してしまう。この短編集の題名となっている 'In Between the Sheets' は、妻と別れて暮らしている主人公の物語である。ある日娘の Miranda に会いに行くと、彼女は女友達の Chairmair とベッドのシーツの中にいた。'In Between the Sheets' は Rolling Stones の曲でもある。彼女らはいわゆるレズである。休日に娘たちを彼のフラットに招待するが、夜中彼は娘のオルガスムスの声を聞く。マキューアンはこのような、初期の短編小説では現代人の倒錯した性をこだわって描いている。性器を表す語彙もかなり多く、「グロテスク」な描写も彼の特徴となっている。「ユーモア」の点からしてもかなり円熟した片鱗を見せている。しかし、もう一つの彼の特徴は、そういった変質した性に対してなんら自分の判断を下していないことである。作品のどこを読んでもモラルが見当たらないのである。

3. *Enduring Love*

マキューアンはこの後、1981年に変質的な性愛を扱った *The Comfort of Strangers* を出版し、1992年には *Black Dogs* で初めて歴史に足を踏み入れ第二次大戦中のドイツ軍が残した軍犬を描いているが、モラルが小説のテーマにはまだなっていない。1997年に出版された *Enduring Love* から彼はモラルを初めて小説の中心テーマに据えて自分の意見を述べるようになった。*Amsterdam* も含めて、この二つの作品に関してすでに筆者が小論で卑見を述べているので、詳しくはそちらを参照していただきたい。²

Enduring Love は冒頭から、気球に取り残された少年を主人公の Joe Rose と数人の男たちが助け出そうという緊迫した場面から始まる。他の男たちとは、42歳になる医者 John Logan と、28歳の無職の青年 Jed Parry と二人の農場労働者であった。男たちは必死に気球の籠にしがみつき、それが空に舞い上がるのを阻止しようとする。しかし、想像を絶するような突風が吹き、誰か一人がこらえきれずに手を離したのがきっかけで気球は瞬間に空に舞い上がり次々に男たちは手を離していく。最後まで手を離さなかった John が最後に力尽きて崖から地面に落ちて死んでしまう。混乱した状況下なので男たちの間に統率は取れていなかったが、もし全員で気球を押さえ続けていれば悲劇は起こらずにすんだと Joe は後になって思う。そして、果たして最初に手を離したのは自分ではないかと小説の最後に至るまで自問するのである。

.....for there was a deeper covenant, ancient and automatic, written in our nature. Co-operation—the basis of our earliest hunting successes, the force behind our evolving capacity for language, the glue of our social cohesion. Our misery in the aftermath was proof that we knew we had failed ourselves. But letting go was in our nature too. Selfishness is also written on our hearts. This is our mammalian conflict—what to give to the others, and what to keep for yourself. Treading that line, keeping the others in check, and being kept in check by them, is what we call morality.³

マキューアンが「モラル」について深く考えていることを窺わせる文章である。哺乳動物、すなわち人間は最初からジレンマを運命付けられていた。つまり、「自分を取るか、他人を取るか」。自

分を取れば、それは「わがまま」であるし、他人を取れば、それは「協力」である。その境界線をうまく進んでいくのが'morality'なのである。その狭間で悩むJoeは逆に言うと最も人間らしいのかも知れない。

物語はこの後意外な展開を見せる。それはJedの変質的な行動である。彼は事件の後、ストーリーカーのようにJoeにまわり付く。一種の精神病、つまりクレラムボルト症候群（宗教的色彩を帯びたホモ・セクシュアル）で、家の前でJoeを待っていたり、外出先まで尾行したり、「神を理解し、共に神のもとへ行こう」と長い手紙を書いて寄こしたりする。Joeは妻のClarissaに話す但她は半信半疑で、警察に相談しても実際に危害が加えられていないと取り合ってくれない。そうこうするうちに、Joeから冷たくあしらわれていたJedは暗殺者を雇って彼をレストランで射殺しようとするが、失敗する。身に危険を感じたJoeは古い友人から銃を手に入れ、最後にはClarissaを人質に家に立てこもったJedを射殺する。このような展開になると、*Enduring Love*はどこか異質な要素が交じり合った小説のようである。David Malcomは*Understanding Ian McEwan*の中で'mixed genre'という言葉で表現している。⁴つまり、人間のモラルを掘り下げる心理学的小説と、犯罪者を追い詰める探偵小説、この二つが入り混じっているのでマキューアンが果たしてこの小説の中で一番言いたかったことが何なのか不明瞭になっている。事実、*Enduring Love*の批評や解説を見ても、全てが常軌を逸したJedの変質的な愛が中心テーマとして議論され、Joeのモラル葛藤、Johnの勇氣ある行動が少しも取り上げられていない。

さて、Joeは気球事件で亡くなったJohnの夫人を探し出して会っている。彼は、最初に手を離れたのが自分ではなかったことを伝えたかったのである。しかし、夫人は意外な事実を彼に打ち明ける。ここが、マキューアンのストーリー展開のうまさである。それは、Johnの車にピクニック用のランチと女物のスカーフが残されていたことであった。方向違いの公園で夫は何をしていたのか、夫人によれば不倫相手といったのではないかと言う。彼の死も、純粋に少年を助けたかったからではなく、その場にいた若い女性に勇氣ある行動を見せたかったからではないかと、Johnのモラルに疑いを示す。夫人はJoeに何とかこの女性を探してもらえないだろうか頼む。理由を尋ねた彼に、夫人は「殺してやりたい」と正直に自分の感情を打ち明ける。

最後の場面は気球事件のあった公園である。JoeとClarissa、そしてJohnの夫人と子供たちが集まる。そこに若い女性を連れて老人が現れる。若い女性は女学生で、老人は彼女を教えている教授であった。30歳以上も年が離れているが、彼らは愛し合っていた。あの事件のあった風の強い日、彼らは公園にピクニックに行こうとしていたが、途中で車が故障してJohnの車に乗せてもらっていた。Johnが気球から落ちる様子を目撃した彼らは、気が動転し、このまま残っていれば自分たちの関係が世間に知られてしまうと思い、その場から逃げたのである。老教授は夫人に「彼は非常に勇氣ある人でした。それは私たち他の人間が夢見ることは出来ても、とても実行できない種類の勇氣なのです」と告げる。彼は夫人の疑いを晴らすために、辞職覚悟で名乗り出たのであった。小説の最後でJohnのモラルが明らかになる。マキューアンは「ほんの一秒だけ他人を思いやる気持ちが他の男たちよりも強かった」と表現することによって、現代人が忘れかけている、あの狩猟世界での「協力」を思い起こさせるのである。彼は*Enduring Love*において、初めてモラルをテーマに据えて何が勇氣ある行動なのか自分の意見をはっきりと述べているのである。

4. Amsterdam

1998年度ブッカー賞 *Amsterdam* の冒頭は46歳で病死したMolly Laneの葬式から始まる。病名は

アルツハイマー病らしい。葬式に参列したのは作曲家の Clive Linly と新聞の編集者 Vernon Halliday である。二人は親友で、Molly の元愛人であった。もう一人の元愛人、外務大臣の Julian Garmony も参列していたが、彼らとは犬猿の仲である。Clive はミレニアム祭に向けて交響曲を作曲中であるが、主旋律がなかなか浮かんでこない。Vernon も大手の新聞社 *The Judge's* の編集長であるが、慢性的な販売部数の落ち込みに悩んでいる。彼らは、もしどちらかが Molly のような病気になったら安楽死させてくれと互いに約束を取り交わす。

Vernon は *The Judge's* の株主に呼び出され、外務大臣 Julian が化粧をして女性の下着をつけ淫らなポーズをとっている写真を見せられる。それは生前の Molly が自分の寝室で撮った Julian の異常な性癖を示すものであった。Vernon は落ち込んだ自社の販売部数を上げる絶好の材料と考え、その写真を新聞に載せようとする。しかし、Clive は写真が Molly の私的なものなので、「彼女は君を軽蔑するだろう。はっきり言って、君は彼女を裏切ろうとしている」と Vernon のモラルのなさを指摘する。このように Clive が見せた態度はまさに「モラルの騎士」であるが、後に湖水地方で見せる行動はまるで別人である。

Clive はミレニアム祭で演奏する交響曲の主旋律を仕上げようと湖水地方に出かける。自然豊かな山々を登っているうちに、予想したように美しいメロディーが彼の心に聞こえてくる。それを忘れないうちにノートに書き込もうとしていると、行く手に男と女が争っている場面に出合う。男は女を岩陰に引きずり込もうとしている。彼は選択に迫られていた。女を助けに行くか、それともこの場所から離れて主旋律を書き留めるか。まさに、マキューアンが *Enduring Love* で示したモラルティー、つまり「他人を取るか、自分を取るか」の問題である。結局 Clive は女を助けに行かなかった。人の命よりも自分の「音楽」のほうを取ったのである。

ロンドンでは Vernon が写真の公表を翌日に控えて編集会議を行っていた。巷にはすでに外務大臣の淫らな写真の噂が広まっており、*The Judge's* の販売部数も上がっていた。鼻高々の彼にとって忌まわしいのは写真掲載に反対した Clive であった。彼のことを考えると、先ほどの会議で話題になった湖水地方の事件を思い出す。実は Clive が出会った男は連続 8 件のレイビストで、当の女性は助かったがその後襲われた女性は殺されていて、現在警察に拘留されている。その男の罪を立証するために Clive の証言が必要になっていた。しかし、彼は交響曲の仕上げに忙しくそれどころではない。今度は Vernon が「シンフォニーよりも大切なものがある。それは人間と呼ばれるものだ」として彼のモラルを責め立てるのである。二人が電話で罵り合っているときに、Vernon の秘書が Mrs. Garmony がテレビに出ているのを伝える。写真掲載を明日に控えた Julian の夫人がいかなる会見をするのかみな固唾を飲んで見守る。こういったマキューアンの場面の切り替えのうまさは、まるで劇を見ているかのようなものである。彼女は外科医で、難しい心臓手術を終えたばかりで白衣を着ていた。全てが Julian の所属する党の演出である。彼女は例の写真を見せて、「愛は悪意よりも強い」と言って、じっとカメラを見つめ、その向こうにいる Vernon に「あなたのモラルは蚤のように小さいのね」と言い放った。この会見のあと視聴者の同情はいっぺんに Julian に傾き、Vernon は悪者になってしまい、結局彼は責任を取らされて新聞社を首になってしまう。そのあと彼の元に Clive から 'You deserve to be sacked' と書かれた葉書が届く。彼は実はテレビ会見を見ていない。ただ仕事が邪魔された腹いせに書いただけで「お前なんか首になってしまえ」くらいが意味なのである。しかし、Vernon が実際に首になった後では「ざまあみろ」と毒の強い意味になってしまう。このようにいろいろな要因が重なり合って、やがて二人の心には殺意が芽生える。

オーケストラのリハーサルがアムステルダムで行われ、二人はレセプションの席で顔を合わせる。お互いがそれぞれ二つのシャンペン・グラスを持ち、笑顔で相手に近づく。そのシャンペン・グラ

スの一つには毒が入っていた。お互いがお互いの盛った毒によってホテルの自室で死んでいく。Cliveの作曲した交響曲がベートーベンを盗作した駄作であることが分かり、ミレニウム祭のコンサートは中止になる。新聞は二人の死は将来を悲観しての自殺と報道するが、Julianだけは二人が殺し合ったことを信じて疑わなかった。まさに、この小説の冒頭で二人が約束したとおりに、安楽死が認められているアムステルダムで、二人はお互いの手で安楽死させられたのである。

このように *Amsterdam* は、モラルを扱っていながら前作の *Enduring Love* とは趣がかなり違っている。モラルを失った者同士が、お互いのモラルをけなし合うコメディ・タッチで描かれている。TLSは「明らかにこの本は娯楽のカテゴリーに入る」、アマゾン・コムは「中身が空虚」という批評を載せている。この作品がブッカー賞を受賞したとき、“‘make-up’ nomination”と囁かれた。これは、前作の *Enduring Love* でブッカー賞をもらうべきだったと考える読者が多数いたからである。マキューアンはその後のインタビューで次のように答えている。

It was a real pleasure to write *Amsterdam*. If I had to characterize my mood, I wrote in a state of glee. It was a very different kind of writing experience from *Enduring Love*, which was full of almost nightmare intensity—which in itself was exhilarating. But this had a quality of...I kept thinking, “If nobody else likes it, I don’t give a damn, because I really am having fun.”⁵

モラルをテーマにトラジ・コミカルに描こうとすれば、こういう作品になるのであろうか。マキューアンからすれば *Enduring Love* とは違った小説を書きたかったのであろうし、書きながら彼自身楽しめたのだから、どういふ批評を浴びようが気にしていないのである。

5. *Atonement*

この小説の冒頭は13歳の文学少女 Briony Tallis が、ある夏の暑い日に母と住む大きな屋敷で自ら書いた劇の上演の準備をしているところから始まる。いやがる従兄弟たちを説得してリハーサルを始める彼女だったが、庭で異様な光景を目撃する。それはケインブリッジ大学から帰ってきている姉の Cecilia と、この屋敷の使用人の息子 Robbie Turner の行動であった。二人は泉のほとりで話をしているのだが、遠くから見ていると彼はどこか姉に対して高圧的に見え、そうこうするうちに姉はブラウスとスカートを脱いで下着姿になって泉に入っていくのである。Brionyはこの光景をどう理解してよいのか分からなかった。実際は、高価な年代物の花瓶をふとした拍子に二人で割ってしまい、怒った Cecilia が服を脱いで泉に落ちたその破片を取ってきただけのことである。しかし、この光景はまだ大人になっていない、そして想像力が光一倍強い Briony にとって、力づくで女を犯す男のイメージを持つのであった。彼女は、今見た光景から小説の構想を練る。

She could write the scene three times over, from three points of view; her excitement was in the prospect of freedom, of being delivered from the cumbrous struggle between good and bad, heroes and villains. None of these three was bad, nor were they particularly good. She need not judge. There did not have to be a moral. She need only show separate minds, as alive as her own, struggling with the idea that other minds were equally alive. It wasn’t only wickedness and scheming that made people unhappy, it was the confusion and

misunderstanding; above all, it was the failure to grasp the simple truth that other people are as real as you. And only in a story could you enter these different minds and show how they had an equal value. That was the only moral a story need have.⁶

これは Briony の小説の構想、あるいは小説論であるが、これをマキューアンのものと考えるときに重要な点が見えてくる。「出来事を三人の視点から書く」というのは、これから起こる事件を Robbie, Cecilia, そして Briony の立場から書かれることを暗示している。「善悪の判断、誰がヒーローで悪人かを決めるモラルはいらない」というのは、マキューアンが小説の中で何が善で何が悪なのか判断するのを意識的に避けてきたことを意味する。「人を不幸にさせるのは悪意や悪巧みだけではない。それは混乱であったり、誤解であったりする」というのは、二人の恋人たちの将来を破滅させるのは実に小さな誤解から生じることを示している。つまり、マキューアンは人それぞれが違うように、人それぞれが違ったことを考え、違ったことを感じ、そして違った価値基準で行動していると考えるのである。表面に現れてくる行動の善悪を小説の中で判断しようと彼は思わない。そういった行動を起こすに至った登場人物たちの内面、つまり気持ちそして感情の変化を公平に同様に価値あるものとして描くのが小説の「モラル」と考えるのである。

さて、家に帰った Robbie は自分の横柄な態度を反省して、Cecilia に詫言の手紙をタイプで打つ。どこかぎこちない彼の態度は彼女を愛しているからであり、脳裏には昼間泉で見た下着姿がちらついて離れない。思わず彼は、'In my dreams I kiss your cunt, your sweet wet cunt. In my thoughts I make love to you all day long.' と続けて打ってしまう。勿論こんな手紙は渡せない。今度は手書きで書き始める。夕食会のために正装し、屋敷へ向かう途中彼は Briony を見かけたので、手紙を託す。ここで彼は重大な間違いを犯す。封筒に最初にタイプで打った手紙を入れたのだった。Briony は泉での一件を見ているので、封を破いて中の手紙を読んでしまう。彼女にとって今まで聞いたことのない単語であったが、おおよそ体のどの部分を指すか見当が付いた。従姉の Lolla にそれを見せると「彼は間違いだわ。間違いは人を傷つけるわ」という答えが返ってきた。彼女は姉を狂った Robbie から守ろうと決心を固くする。

Briony が計画した劇の上演は従兄弟たちの足並みがそろわず不可能となった。特に双子の兄弟はわがままで、注意した Lolla に暴力をふるう始末で、召使 Betty に咎められた彼らはわずかの食料を持って家出する。一方手紙を受け取った Cecilia は Robbie を半ば自分から書斎の暗がりには誘い込み、彼らは愛し合う。それを目撃した Briony は姉が暴力を振るわれていると誤解する。夕食の席に双子の兄弟がいないのに皆が気づき、手分けして捜索することになる。ここで Lolla が何者かにレイプされる。彼女は暗かったし、後ろから羽交い絞めにされたので犯人の顔をしっかり見ていない。その場に駆けつけた Briony は、今までのいきさつから Robbie の仕業と確信し、実際に見ていないのに「彼を見た」と警察に証言する。行方不明の双子は結局 Robbie に助けられて戻るが、彼は警察に逮捕され強姦罪で刑務所送りとなる。一章はこのような熱い夏の一日の事件、Briony が犯した罪が描かれている。

二章は、結果として Robbie がヨーロッパ戦線に送られ、ドイツ軍の空爆に追われながらダンケルクへ逃げて行く内容である。フランス人の農家で、パンとワインをご馳走になり久しぶりにゆっくりとした気分が納屋に横になった彼の脳裏をかすめるのは、ロンドンの Strand で会った Cecilia の横顔である。時は1939年で、3年半ぶりの再会であった。彼女は1935年11月に彼の判決があってから、家族とは袂を分かち見習い看護婦として働いていた。二人ともほんのわずかな外出許可を利用しての再会で、バスで帰る彼女をバス停で見送るとき、彼らは長い時間抱きしめ合う。本当に彼ら

は愛し合っていたのだった。

戦場にいる彼の元に Cecilia から届いた手紙には、Briony がケインブリッジ大学を辞めて、彼女と同じように看護婦の見習いをしていることが告げられていた。19歳になった彼女は初めて自分のしたことを完全に理解し始めているらしかった。彼女の行為は一つの償いであり、証言の取り消しも望んでいるようだった。ダンケルクへ向けて歩いている彼にとってやはり彼女の行為は今でも許せるはずはなく、こうむった痛手は永遠に続きそうだった。歩きながら、彼は1932年の6月のことを思い出す。この回想は 'fragmentariness' と呼ばれるもので、小説の中で起こっていることとは直接は関係のない「断片」と見なされるものである。Briony が10歳、Robbie が19歳のときの小さな出来事である。彼らは川のほとりを歩いていた。彼女が「もし私が川に落ちたら、助けてくれる」と尋ねた。彼が「勿論」と答えると、彼女は突然川に飛び込んでしまう。驚いたRobbie も服を着たまま飛び込み、必死の思いで彼女の体を岸へ引き上げる。冗談にも程々があると叱り付けるが、Briony はそれにはかまわず「何故あなたに助けて欲しかったかわかる。あなたを愛しているからよ」と答える。この小さな出来事はやがて二人の記憶から消えていく。小説の筋の運びとは直接関係がない遠い昔の「断片」ではあるが、何故か読者には Briony の犯した罪を考えると生き生きとした光景に映るのである。

マキューアンはこのダンケルクの場面を書くに当たって、いろいろな資料を検証した形跡がある。たとえば、ダンケルク近郊の地形、あるいは実際にダンケルクへ向かった兵士の残した記録を読んでいるのに違いない。たとえば、Robbie はダンケルクに向ってのろのろ動いているトラックを見かけるが、それに乗ろうとしない。トラックはドイツの爆撃機にとって格好の標的であり、「歩いていれば襲ってくるものが見えるし、聞こえるのである」と言っている。史実をもとにしていなければこのようなことは書けない。*Black Dogs* (1992) における黒い犬はドイツ軍が残した犬が野犬化したものだった。マキューアンはだんだんと歴史に興味を持ち始め、それを小説の材料にしているのである。さて、ようやくダンケルクに着いたRobbie は、他の多くの兵士たちと壊れた家の地下室で一夜を明かし、イギリスに帰る船を待つのだった。

3章はロンドンが舞台で Briony が語り手となる。彼女はやはり自分が犯した罪を償おうとして、意図的に見習い看護婦という過酷な環境に身を置いているのだった。婦長に叱られながらも彼女は立派な看護婦に育っていく。彼女は小説を書き続けていて、それを出版社に送っていた。彼女の小説論を、再びマキューアンのものと考えるとかなり興味深い。

A modern novelist could no more write characters and plots than a modern composer could a Mozart symphony. It was thought, perception, sensations that interested her, the conscious mind as a river through time, and how to represent its onward roll, as well as all the tributaries that would swell it, and the obstacles that would divert it. If only she could reproduce the clear light of a summer's morning, the sensations of a child standing at a window, the curve and dip of a swallow's flight over a pool of water. The novel of the future would be unlike anything in the past. She had read Virginia Woolf's *The Waves* three times and thought that a great transformation was being worked in human nature itself, and that only fiction, a new kind of fiction, could capture the essence of the change.⁷

マキューアンが描こうとしているのは、過去の小説家たちがそうした登場人物やプロットではな

い。それは思考、知覚、感情といった川のようにその流れを変える「意識した」心であった。澄み切った夏の朝の光を表現するために、水の上を鋭角的に飛ぶツバメを描くように、マキューアンは人間の心に起こる大きな変化を描くことによって、モラルを表現したかったのである。そして、新しい種類の小説だけが人間の心の大きな変化を捉えることが出来ると考えたのだった。Brionyが何故自分の罪を意識するようになったのか Cecilia に尋ねられたとき、彼女は「成長したから」と答えている。マキューアンは Briony の意識の変化を一番この小説で書きたかったのではないかと思う。

Briony は姉が住んでいるフラットを尋ねる。驚いたことに部屋には Robbie が来ていた。5 年振りに会う彼らには重い沈黙が流れる。Robbie は激情に駆られ、Briony に彼女の首をへし折って部屋から叩き出してやりたいと叫ぶ。Cecilia はそんな彼を「私の目を見て」と強く抱きしめ、彼の激情を和らげようとする。Briony は帰りの地下鉄の中で、「自分が会いたいと思っていたのは姉、正確に言うとな Robbie と一緒にいる姉だったのだ」と改めて思う。そして彼らが愛し合っている姿を見て慰められている自分を発見する。

最後の章は、'London, 1999' と題され、Briony が 77 歳になっている。彼女はタクシーに乗って The Imperial War Museum へ資料の校正に向かう。大きな大砲の前で、現在では卿の称号を得ている Marshall 夫妻を見かけるが、彼女は意識して彼らを避ける。実は Marshall 夫人は Lolla であり、彼女を過去にレイプしたのが現在の夫の Peter Marshall であった。仕事を済ませた Briony は、あの夏の日の事件の舞台となった我が家へと向かう。建物は今ではホテルに改装されていて、その夜は彼女の誕生日とあって、子供や孫、そして曾孫たちも集まって祝う段取りとなっていた。パーティーの席では、事件のあった夜上演されることのなかった 'The Trials of Arabella' が子供たちによって上演された。Briony はこのときには有名な作家になっていて、最後の小説を仕上げていた。それはあの事件を克明に描いたもので、Marshall 夫妻が生きている間には出版することが出来ないものであった。彼女は 1940 年に Robbie が戦地で敗血症で、そして Cecilia が地下鉄の駅でドイツ軍の爆撃で死んで以来、59 年の「償い」の人生を送ってきた。もうその人生も医者との診断から終わりに近づいてきた。

The problem these fifty-nine years has been this: how can a novelist achieve atonement when, with her absolute power of deciding outcomes, she is also God? There is no one, no entity or higher form that she can appeal to, or be reconciled with, or that can forgive her. There is nothing outside her. In her imagination she has set the limits and the terms. No atonement for God, or novelists, even if they are atheists. It was always an impossible task, and that was precisely the point. The attempt was all.⁸

結局、罪を償うことは不可能である。それが不可能であるとすれば、罪を償おうとする努力に救いがあるのである。そして Robbie と Cecilia が愛し合い、つかの間でも幸せであったという事実は誰によっても、何によっても消せないのである。Atonement は、果たして罪は償えるのかという大きなテーマを掲げながら、人間の不朽の愛を描いたマキューアンの傑作の一つと思われる。

6. おわりに

くしくもマキューアンの最新作 *Atonement* によって彼が考える小説、これからの小説がそうあるべき姿を Briony の考えから読み取ることができた。登場人物を克明に描くことも、プロットにこだ

わることも、また登場人物の行動の善悪を判断することも必要ではなく、大事なのは登場人物の感情の変化を描くことであった。登場人物の感情を公平に価値あるものとして描くことによって、マキューアンは彼が考えるモラルを表現したのである。彼は、2001年9月11日の事件に関してインターネットにメッセージを送っている。それを引用することによって、この論文を締めくくりたい。

If the hijackers had been able to imagine themselves into the thoughts and feelings of the passengers, they would have been unable to proceed. It is hard to be cruel once you permit yourself to enter the mind of your victim. Imagining what it is like to be someone other than yourself is at the core of our humanity. It is the essence of compassion, and it is the beginning of morality.⁹

[注]

1. *First Love, Last Rites*, p. 129.
2. 「イアン・マキューアンの *Amsterdam*——モラル葛藤の欠如」, pp. 49-57, 『OTSUMA REVIEW』 No. 32.
3. *Enduring Love*, p. 14.
4. *Understanding Ian McEwan*, p. 171.
5. www.yahoo.co.uk
6. *Atonement*, p. 40.
7. *Ibid.*, pp. 281-2.
8. *Ibid.*, p. 371.
9. www.yahoo.co.uk

[参考文献]

- Malcolm, David. *Understanding Ian McEwan*, University of South Carolina Press, 2002.
- McEwan, Ian. *First Love, Last Rites*, Vintage International, 1975.
- Ibid.*, *In Between the Sheets*, Vintage, 1978.
- Ibid.*, *The Comfort of Strangers*, Vintage, 1981.
- Ibid.*, *Black Dogs*, Jonathan Cape, 1992.
- Ibid.*, *Enduring Love*, Jonathan Cape, 1997.
- Ibid.*, *Amsterdam*, Jonathan Cape, 1998.
- Ibid.*, *Atonement*, Jonathan Cape, 2001.